

装入し、6名で操業されている。ほかに6tの静置式キュボラもつかっている。

第Ⅱ工場は500kgないし3tの中型鑄物を目的とし、10t天井起重機3基を具えている。キュボラは第Ⅰ工場と共用である。

第Ⅲおよび第Ⅳ工場は現在使っていない。

第Ⅴ工場は合成砂生型鑄物を目的としてつくられたものであつて、砂配合調節により型欠陥を容易に除き得る。非鉄物としては5~6tのAl鑄物をもつくっている。Shell Moulding設備もあるが、現在は注文がないので休止している。本工場の外側は3tの酸素吹込みキュボラ(昭30年8月迄)があり、本炉は内径780mm、除塵装置をも見えている。

本工場の合計月産能力は240~250tであるが、普通200t程度をつくっている。

なお、昭和31年、同敷地内に、(株)池貝金属研究所が設置されたが、これは池貝鉄工の素材諸部門の研究課を発展的に解消し、鑄物に関する本格的な研究とその製品化を目標に創立され、池貝式キュボラ、同付帯装置、油砂改良剤ノーベイン、木型面取用プラスチック・コーナー、高級特殊鑄物などをつくっている。本研究所は今回は見学しなかつた。

#### 日本麦酒株式会社川口工場

第9班は、池貝・川口工場見学後、ただちに本班の魅力たる日本麦酒(株)川口工場に向つた。本工場は川口市並木町1-1に所在し、川口駅から大宮寄りの線路ぞいにある。11時頃到着、ホールに導かれて本工場の説明を拝聴し、天然色ビール映画を見た後、見学を行つた。本工場は昭和10年根津氏先代により建設され、敷地面積35,000坪、生産能力日産40万本である。班員は浸漬槽、発芽罐、乾燥炉、仕込釜、濾過槽、煮詰釜、冷却機殺菌槽、打栓機、壘詰機、洗ビン機、濾過機、貯酒タンク、醸酵槽、札貼機、ビン詰装置の順に見学を行なつたが、鉄鋼工場とちがつて屋内の清潔が良く保たれている。なお各大型機械装置および容器の耐用年数が高く旧設備がいぜんとして動いており、耐蝕性用途にも、ステンレス使用がなお不足しているように感じられた。

見学30分後、ホールに戻り、同社提供の無税ビール試飲を行ない、持参の昼食をとつた。親切な係員氏の説明でビールの飲み方、「スタウト」の経済性(同容量のビールに比し、アルコール度が2倍に近い)、新製品カナディアン・ドライの新鮮味などを教えられた。本班は

なおつぎの旅程があるため、午後1時半、名残りをおしみつ同工場を立去つた。

#### 日本車輛株式会社蔵工場

第9班の大型バスは川口ビール工場をはなれて、午後2時頃、川口市大字芝2870所在日本車輛(株)東京支店(蔵工場)に到着し付近の従業員会館ホールで説明をきいた。本工場は蔵駅の付近、やはり線路ぞいにある。本会社は、名古屋に本店および同工場があり、明治29年設立、全額払込資本440百万円である。主要製器は機関車、(本店のみ)、電車、客車、貨車の新造修理および改造、ディーゼル、信号保安装置、車輛用部品一式である。東京支店工場は、大正9年東京市隅田町に買収設置されたが、昭和9年現在の場所に移された。東京支店工場は敷地約4万坪、建家1万坪であつて敷地内は相当に木造建物が密集している。従業員は約1600名、(本店は3450名)うち工員は1240名(本店2800名)、である。月産能力は客電車25輛、貨車80輛、分岐器150組である。(本店工場の生産能力は蒸気機関車15輛、客電車25輛、貨車300輛)。これらの車輛および分岐器は昭和21年以来、ソ連、タイ、インド、フィリピン、台湾、南朝鮮、ビルマ向に相当輸出されている。

東京支店工場の主要設備機械は、旋盤、形削盤、フライス盤、平削盤その他の工作機械210台、製材木工機94台、汽罐4台、キュボラ1基、鍛造設備7台、熔接機148台、圧縮機32台、650KVA発電機1台、超音波探傷機、X線機、軌路試験機などからなつている。

説明聴取後、ただちに見学に移つたが、客車組立、貨車組立、塗工、木工、台車、旋削鍛冶、客車鋼体組立、熔接、貨車鋼体組立、鋼材ケガキ、貨車鋼体組立工場などをめぐつて導かれた。一例を全重25tの客車にとると、その中70%約20t以上は鋼材からできており。その中14~15tが普通鋼圧延鋼材製、車輪車軸は高炭系鋼、100~150kgの制動子が鑄鉄、非鉄部品はきわめて少量である。大体の傾向として、リベット部品が少なくなつて熔接、プレス部品などで置換されているため、昔より騒音が少なくなつた。最近は特殊なタンク車なども製造している。塗装工場での赤外線利用なども印象的であつた。

かくて午後4時、見学を終了し帰路についたが、その帰路バス中は班員大部分がビール工場のafter effectのため軽眠に襲われ、午後5時東京駅に帰着解散した。

(日本鉄鋼連盟・高見沢栄寿)